親と子の童話の森

おしゃべりピーマン

作 鈴木義子
絵 にしわきコージ

かなちゃんは、小学二年生。今、ピーマンを育てています。近所のおじいちゃんが、「かなちゃんもピーマンを育ててみるかい。」と持ってきてくれたなえです。

「お水は毎日あげるんだよ。お日さまにも、十分当てるんだよ。」

そうおじいちゃんが教えてくれたのに、かなちゃんのお世話は気分しだい。お水をあげない日もあります。だってかなちゃん、おじいちゃんにはないしょだけど、ほんとうはピーマンが大、大、大キライなのです。

だから、かなちゃんのピーマンはまだヒョロヒョロ。それに、このところ暑い日がつづいて、やせっぽちのくきにかれそうな葉っぱが、さびしそうにゆれています。

見かねたお母さんが、かなちゃんをよびました。

「かなちゃん、お水が足らないんじゃない。」

そう言いながら、じょうろを取りにいきました。すると……。

「もう、ほんとに！」

なんだかおこったような声が聞こえます。

「ちゃんとお世話してよね。プンプン！」

かなちゃんは、びっくりしてとび上がりそうになりました。

「どうしたの？　ずいぶんこわい顔をして……。」

もどってきたお母さんが、ピーマンに水をやりながらかなちゃんをのぞきこみました。

「はあ～、なんてつめたいお水！　気持ちいい。」

また聞こえました。どうやら、ピーマンのなえがしゃべっているようです。

「お母さん、ピーマンがしゃべってるよ。」

「何言ってるの。さあ、つづきはかなちゃんがやってね。お母さんいそがしいから、おねがいね。」

なぜかお母さんには、聞こえないようです。すると
もう一度、
「ちゃんとお世話をするってやくそくしてよ。」
「えっ？　う、うん。わかった。やくそくする。」
おしゃべりで、ごういんなピーマンにむりやりやく
そくさせられたかなちゃんでしたが、次の日からたい
へんでした。
「キャー、虫だ。虫とって！　葉っぱが食べられちゃ
う。」
と言われれば、虫を一つずつていねいにとってやりま
した。
「もっとお水ちょうだいな。」
とせがまれれば、たっぷり水をやりました。
「ほんとうに毎日、小言ばっかり……。」
と、かなちゃんはひとり言をつぶやきながら、それで
もピーマンの明るく、元気な声を聞くのが楽しみにな
りつつありました。
そのかいあって、ピーマンのくきはだいぶ太くなり、
葉もきれいな深い緑色になってきました。
ある日、ピーマンの葉のわきに小さな丸いものを見
つけました。
「何だろう。もしかしてつぼみ？　やったあ。」

そう、つぼみがつき始めたのです。
「きれいにお花をさかせたいから、お日さまにもちゃ
んと当ててね。」
と、やさしい声がしました。
「はい、はい。」
かなちゃんは、もうすっかりお姉さん気取りです。
いつしか、かなちゃんからも話しかけるようになり、
毎日毎日、楽しくお世話ができるようになりました。
そして、ついに一つめの花がさきました。小さな白
い花です。

「はあ、やっとわたしも一人前。かなちゃん、お世話
してくれてありがとう。」
すると、次から次へとたくさんの花が開き始めまし
た。花がさくたびに、ピーマンは「ありがとう。」の大
合唱。
「ありがとう。ありがとう。」
ほんとうに、にぎやかです。かなちゃんもうれしく
って、お花を見てはニコニコ顔。
ところが、悲しいことに何日かすると、花はポトリ
ポトリと落ち始め、おしゃべりピーマンは何もしゃべ
らなくなりました。
「ねえ、どうしたの？」
いくら聞いても返事がありません。それからも毎日
様子を見にいきました。ピーマンの声が聞きたくて、
今まで以上にお世話をがんばりました。重いじょうろ
も一人で運んでお水をやりました。ピーマンのお気に
入りの日なたへ、はちを移動させてやりました。そし
て、いっぱい話しかけました。それなのに……。
かなちゃんは悲しくなりました。
「もう会えないの？」
むねのおくがキュッとなって体があつくなります。
なみだがこぼれそうです。

とそのとき、
「おまたせー。おいしいピーマンのできあがり。」
と元気のいい声が聞こえてきました。よく見ると、か
わいいピーマンの赤ちゃんがたくさんついています。
「やった！　ピーマンだ。お母さん見て見て。」
家の中にかけ上がったかなちゃんの、足音が明るく
ひびきわたりました。ピーマンもかなちゃんに負けな
いくらいの大声でさけんでいます。
「おいしいピーマンだよー。かなちゃーん、食べてー!!」